

# “God help the South.”

## カーソン・マッカラーズの『針のない時計』における南部と病

松井美穂

### 1. はじめに

Carson McCullers (1917-67) の *Clock Without Hands* (1961) は、彼女が自らの病や、夫や母の死といった苦難と戦いながら書いた生涯最後の長編小説である。主人公は、白血病と余命を宣告された薬剤師である南部白人男性 J. T. Malone。物語は “Death is always the same, but each man dies in his own way.” (1) という一節で始まる。これは作者が書こうとしたのは「いかに死を迎えるか」であると同時に「いかに生きるか」ということでもあることを示している。

小説はマローンを通して「生と死」という抽象的かつ普遍的な問題を探究するが、同時に 1950 年代の南部にとって極めて重要な社会問題、すなわち人種隔離撤廃への動きと、白人側の「人種混淆の拒否」もテーマとなっている。実際小説は、マローンの死と、人種隔離を違憲とした最高裁での「ブラウン判決 (Brown v. Board of Education)」(1954) で終わる。主要な白人登場人物は racist か否かに分かれる。前者を代表するのはかつて下院議員であった白人至上主義者の Judge Fox Clane で、マローンも判事ほどではなくとも南部の保守派であった。一方後者に関しては、弁護士として裁判で黒人男性の弁護を試みるも失敗する判事の息子 Johnny、そしてジョニーの息子（つまりは判事の孫）であり父と同じくリベラルな考えを持ち始める Jester がいる。これらの白人と深く関わるのが混血の青年 Sherman Pew であり、彼はブラウン判決の直前に白人の暴力により亡くなる。

本作品は出版以降、批評家の評価は否定的なものが多く、その理由の一つとして、マローンの「生と死」という実存的問題と、南部の人種差別という政治的問題が構成上もテーマ上も緊密に結びついていない、ということがあげられている (James 145)。このような批判に対して、ここではマローンとシャーマンの関係を見直すことで、この2つのテーマの結びつきを再検討する。両者は「生と死」と「人種混淆」をそれぞれ体現する人物であり、メタファーとしての「病」を通して南部社会の問題を読者に突きつける人物でもある。

### 2. 南部の病

「ブラウン裁判」などにみられる人種統合への動きは、南部白人の大きな反発を招くことになったのは周知の通りである。その動きがもたらす白人側にとっての最大の脅威は、黒人男性と白人女性が関係を持ち、白い血に黒い血が混じることであった。小説ではそのような白人側の忌避、恐怖、嫌悪が、判事の口を通して、たびたび表明される。実はシャーマンは、その白人が一番忌避していた白人女性と黒人男性の親密な関係による子供であった。そしてジョニーはシャーマンの父が白人女性の夫を正当防衛ではあるが射殺してしまった時に裁判の弁護を担当したのである。

異人種間の関係の忌避が、いわゆる “one drop rule” と結びついているのはいうまでもない。ここでマッカラーズがマローンの「白血病」と南部の「血統」の問題を判事の言葉を通して結びつけていることは重要であろう。判事はマローンの病気を聞くと “A blood disease! Why, that’s ridiculous—you have some of the best blood in this state.” と言い「病としての血」の話を、「血統としての血」の話にすり替えて、立派な血／血統を持つマローンは病気のはずがないと主張する (15)。一方異人種間の関係は、判事にとってはまさに病である (40-41)。つまり判事のような白人至上主義者にとっては立派な「白い血」は病むはずはなく、病んでいるのは “one drop rule” を逸脱した血であり、「白い血」と「黒い血」の混淆を容認し実践する側である。しかし南部の本当の病とは何なのか。

### 3. マローンとシャーマン

マローンとシャーマンは第1章において重要な出会いを果たす。小説はマローンが白血病を宣告されることから始まる。宣告に苦悩する彼はまず教会に慰めを得ようとするが心が癒されることはない。ところがその日、彼は偶然に青い目を持つ黒人青年に出会う。このあたかも自分の後をついてきたかのような黒人を心の中では “bad nigger” と呼ぶが、なぜか心乱され、その男は自分が死ぬ身であることを知っているように感じる (13)。シャーマンの青い目は “sign of miscegenation” であり (Slaven 256)、ここでその目がマローンに言葉にはできぬ大きな影響を与えていることは重要である。つまりこの視線の交換は、自己のアイデンティティを揺るがす他者との出会いを意味する。しかしこの邂逅の意味をマローンは俄に理解することはない。

第1章の最後でもマローンは再びこのシャーマンの目に遭遇する。章の最後の場面でマローンは、薬局で石の「乳棒」を見つめながら、孤独に生や死について思いめぐらす。するとシャーマンが目の前に突然現れ、驚いたマローンは、彼に

とっては“indestructible”(23)であり「生」を暗示する乳棒を落としてしまう。マローンはここでもシャーマンの目が自分の運命を知っているように感じるが、シャーマンは乳棒を拾ってマローンに渡す。つまりここで、マローンは落とした「生」をシャーマンに拾い上げてもらったともいえるが、去っていくシャーマンの姿にマローンは“loathing and hatred”を抱き(25)、死の恐怖に自分は“a man watching a clock without hands”(25)だと感じる。

このように二人は第1章で二度重要な出会いを果たすが、第2章以降彼らが直接出会うことは一度しかなく、両者の関係は平行線のまま物語は進む。一方で二人がそれぞれの立場で自らの「生」の状況について苦悩し、生きる意味を模索する様子も描かれる。そして、マローンの「死すべき運命」を知っていたかのように見えたシャーマンの「死」こそが、マローンの「生」に大きな影響を与えることになる。

#### 4. “Each man dies in his own way.”

ではこの二人がどのように死を迎えたのか。シャーマンは自身の出生に関して、黒人の母が白人の父にレイプされたのだと信じていた。ところが彼はある日両親の裁判の記録を目にし、事実を知る。これは、シャーマンに大きなショックを与え、その後彼は自分の固定観念を振り払うかのように人種の越境を試み、“I’ve got to do something”(215)という思いに突き動かされ白人街に移住する。一方住人たちはシャーマンが境界侵犯したことに怒り驚愕し、判事を中心に行われた集会で彼に制裁を加えることを決議する。その計画を知ったジェスターはシャーマンに警告するが、彼は“Nobody lives for always, but when I live I like to live it up.”(229)と告げ、自ら白人の暴力の犠牲となる。

マローンは迫り来る死を前にして、キルケゴールの『死に至る病』の一節をきっかけに、自らの生を振り返り、“... little by little he had lost his own self.”(149)と気づく。そして死の直前、シャーマンとの関係において、彼は思いがけなく生の意味の問い直しを迫られる。シャーマンの家に爆弾を投げ込む人を決めるくじ引きをした時、マローンは当たりくじを引いてしまうが、彼は魂を危険にさらし“my immortal soul”を失いたくないと協力を拒否する(225)。もちろんこれは南部白人男性としては規範を逸脱した行為であり、判事はこのようなマローンを“invalid”(237)と呼ぶ。

この決断のあとまもなくマローンは死を迎える。と同時に南部社会も、教育現場における人種隔離の終わりを告げる「ブラウン判決」を聞くこととなる。判決を聞き、怒りに燃えた判事はラジオ局に出向き、南部の大義を守るべく“a historic speech”(239)をすることを決意するが、混乱した判事の口から出てきたのは「ゲティスバーグ演説」であった。この混乱は何を意味するのか。判事にとっては自分が発する言葉こそ真実であり、主観的世界こそが真実である。例えば判事自身も、かつて卒中の発作に襲われ麻痺がのこっており、糖尿病も患っているが、「健全な体には健全な魂が宿る」(56)がモットーである彼にとって、病は否定されるべきものである。このような判事の世界には「死」も存在せず、自分が死ぬなどは想像できない。判事が求めるものはこの世での“immortality”である(96)。彼の世界は、病にしる、死にしる、人種にしる、「他者なき」世界である。

このように判事は自ら発する言葉によって世界を構築してきたが、この最後の演説で自らの言葉に裏切られることになる。つまり、最後には、自己こそが他者となってしまった。一方、人種という他者、病という他者を最後には受け入れたマローンは、皮肉にもこの判事の混乱により生涯の最後に「ゲティスバーグ演説」を聞くことになるが、それは南部の規範に抗うことで魂の安らぎを手にした彼には相応しい内容であったともいえる。

#### 5. おわりに

マッカラーズにとって南部は、奴隷解放以降も人種問題から回復できない、未だ病み続ける故郷であったであろう。またそのような南部は、常に病に苦しんでいた自己と重なるところがあったのかもしれない。実は判事とマッカラーズは多くの共通点がある。両者とも卒中による身体的な麻痺があり、ものを書くのには他者に口述筆記を頼む必要があった。このようにあえて判事に、自らと同じ病を背負わせることで、マッカラーズは南部社会の病巣と格闘したともいえる。“God help the South.”は、ジョニーがもはや父である判事の考えを信頼しないことを仄めかした時に、判事が発した“I am the most responsible citizen ... in all the South.”(187)という言葉に対するジョニーの返答である。マッカラーズの生涯は、南部の病とは何なのか、南部の救いはどこにあるのか、死の間際まで問いかけた一生であったといえる。

#### Works Cited

James, Judith Giblin. *Wonderkind: The Reputation of Carson McCullers, 1940-1990*. Camden House, 1995.

McCullers, Carson. *Clock Without Hands*. Mariner Books, 1998.

Slaven, Craig. “Jester’s Mercurial Nature and the Hermeneutics of Time in McCullers’ *Clock Without Hands*.” *Carson McCullers in the Twenty-First Century*, edited by Alison Graham-Bertolini and Casey Kayser, Palgrave Macmillan, 2016, pp.251-68.